

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 14 号

平成 28 年 4 月

聖心女子大学

は し が き

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条による公表を目的として、平成28（2016）年2月19日または平成28（2016）年3月12日、本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は聖心女子大学学位規程第5条第1項（いわゆる課程博士）によるものであるものを示す。

目 次

氏 名	雨宮 久美 (あめみや くみ)	1 頁
学位の種類	博士 (文学)	
学位記の番号	甲第 30 号	
学位授与年月日	平成 28 (2016) 年 2 月 19 日	
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当	
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科	
論文題目	謡曲『石橋』の総合的研究	

氏 名	雨宮 久美 (あめみや くみ)
学位の種類	博士 (文学)
学位記の番号	甲第 30 号
学位授与年月日	平成 28 (2016) 年 2 月 19 日
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科
論文題目	謡曲『石橋』の総合的研究
論文審査委員	(主査) 教授 加藤好光 (副査) 准教授 長野美香 (副査) 教授 小田切文洋 (日本大学国際関係学部)

博士学位論文の要旨

I. 問題と目的

寛正六（1465）年三月九日、政所執事代蜷川親元の日記に、音阿弥が時の將軍足利義政の前で数曲の謡曲作品を披露した旨記されている。その演目中に『志々』という作品が挙げられている。これが能『石橋』についての最古の言及であるという説がある。本研究では、この、古くから「獅子」の観念と密着に結びつき後に『石橋』という演目名で定着した謡曲を取り上げ、日本と中国の様々な史料や伝承などに当たりつつ作品の根柢にある重層的な文化的伝統に光を当てて、作品の性格を浮き彫りにすることを目的としている。

本研究は、『石橋』という一作品について、作品の背景にある能作者の知識世界や雑信仰、また伝承の多様な層がどのように融合して作品化されていったのかという根本的な問題について、前提となる予備知識や基本となる資料を提供しようとするものである。

鍵となる言葉は、「寂照」・「清涼山」・「五臺山文殊菩薩信仰」・「樵翁」または「童子」・「石橋」・「獅子舞」・「獅子と牡丹」である。これらの言葉を手がかりに、『石橋』の作品世界の背景にある文化史的な位相について考察してゆく。以下、各章の構成と内容を概観する。

II. 研究

本論文は、『石橋』の物語世界について歴史的・思想的・宗教的な背景を第一章から第八章において考察した。『石橋』は室町末期に一旦中絶し、江戸時代に能の各流派で復活した演目である。牡丹の花のもとでの獅子の舞はこの曲の一番の魅力となっている。その趣向は歌舞伎舞踊にも採り入れられてゆくことになる。この演目の主題となっている獅子や牡丹はそもそも中国から伝来したものである。『石橋』は、日本と中国双方の豊かな文化的な水脈が背景にある。

具体的に本研究では、『石橋』を構成する各素材を取り出し、第一章以下に検証した。作者未詳作品の多い能の世界は、民衆世界の知識や経験、また信仰に支えられて表現されたものが主になっている。一般に、能作者の知識は、整然とした体系的なものではなく、そこには信仰や伝承などが多層的に混交していたとみてよい。そもそも能は、元は猿楽と呼ばれ、民衆的な娯楽の場から生まれたものであった。猿楽の演者と観客との間には共通した文化的土壌があったはずである。作者は、観客として想定される諸階級のそれぞれの知識水準を前提として作品を制作したはずである。両者の間には知や信仰の一種の共有世界があった。能作者の持っていた、雑然としながらも活力のある知識世界の広がりを考えてゆくことは、能の成りたちを考える上でも重要である。

第一章 寂照（大江定基）

寂照の人物像を明らかにしてゆく。まず寂照のたどった人生を客観的に捉えるため、寂照関連の史料を検討する。史料から読み取れる寂照の人物像は、後年の「三呉道俗以歸嚮」と評される高僧のイメージとはかなり異なる側面を持っている。この落差のなかから、寂照説話の形成過程と説話化の心意を考えてゆく。『石橋』においては、高僧の寂照でも石橋のかかる谷のあまりの深さを前にして思わず足がすくむ。橋の向こうにある「文殊浄土」

への到り難さが、一瞬にして現出する。ここに聖なるものの顕現という劇的な構造を読み取ることができる。

第二章 聖地清涼山

『石橋』の舞台背景として設定されている中国山西省五臺山の文殊信仰について検討する。唐の時代、文殊菩薩の住処としての清涼山（五臺山）は広く信仰を集めていた。文殊菩薩の示現など、『広清涼伝』等に描かれるさまざまな靈験が伝えられている。その文殊菩薩信仰を五臺山に根づかせた不空三蔵が果たした役割を史実から検証する。さらに、五臺山に巡礼し文殊菩薩の靈験を目睹した円仁が、日本への文殊信仰導入において果たした役割についても考察した。

第三章 日本への五臺山文殊菩薩信仰の将来とその流布

日本では文殊菩薩は、民衆にも馴染みが深い。日本における五臺山聖地信仰や文殊信仰の形成に果たした渡海僧らの役割を跡づけることにより、文殊菩薩信仰の日本独自の展開をみてゆく。日本には、行基を文殊菩薩の化身とするなど、独自の説話の展開が見られる。そもそも、『石橋』の創作は、文殊菩薩信仰が室町時代の能楽師たちにとって身近なものでなければあり得なかった。

第四章 中国の説話と詩文に見る「童子」と「翁」の形象

『石橋』の前シテは文殊の浄土と此岸とを取り結ぶ媒介者であり、「童子」とされる場合と「樵翁」とされる場合とがある。本研究では、そのいずれが本来正しいのかを検討するのではなく、双方の文化的表象をそれぞれ取り上げた。まず本章では中国における「童子」と「翁」の形象を論じる。

中国古典に出てくる童子として印象的なものに、爛柯の説話がある。樵の王質が山中で童子たちが囲碁を打つのを見ていたら柯の柄が腐るほど時間が経っていたという話である。しばしば神秘的な存在として描かれる中国古典の童子像を例証した。

前シテとして「樵翁」が設定されるのは、『石橋』中の「山路日暮れぬる樵歌童笛の声」の詞章が、樵翁を詠んだ漢詩に由来するからである。中国古典詩における樵像の変遷を考察すると、山中の生活者に過ぎない樵が、唐代以降、隠者として表象されるようになったことが分かる。

童子も翁も聖なるものに近い存在であることを中国の志怪小説や詩文から論証した。

第五章 中世日本における「童子」と「翁」の形象——聖なるものの象徴として——

前章を承け、本章では中世日本における「童子」と「翁」を取り上げる。

日本の中世社会で相互に補完的な存在であった「童子」と「老翁」についてまず検討し、続いて芸能の世界における両者の関係とその背景にある伝承世界の広がり考察した。「童子」も「老翁」も、俗なるものと聖なるものとの双方に関わって表象されている。日常生活者と対をなすのが童子と翁の存在である。日常性からの脱却や聖なるものの象徴として両者が捉えられていることを、史料などにに基づきながら跡づけた。

第六章 境界としての橋——彼岸と此岸の架け橋——

第四章と第五章で検討した、俗なるものと聖なるものとの相互交渉、その境界を超越して聖性へと飛翔せんとする求道心という劇的な構造が、『石橋』の主題である。二つの相対立する領域を結びつける象徴として橋がある。

中国の古典説話も視野に入れ、日本神話や説話にみる「橋」を検討しながら、橋の境界性やその背後にある民俗的な心意を明らかにしてゆく。続いて橋の神事を取り上げ、民間信仰を基にした橋の表象に言及する。最後に、仏教に現れる橋を検証することで、宗教世界と橋との関わりを考える。求道者としての寂照にとって悟りは遠い目標である。現し身の囚われから解き放たれ浄土へと導かれるのは、頓悟の瞬間の出来事であるが、その超出の前には大きな困難が待ちかまえていることであろう。その苦しい試練の象徴として寂照の前に立ちふさがるのが「石橋」である。ここに石橋の宗教的意義がある。

第七章 獅子の舞

日本の獅子舞の源流は、飛鳥時代に日本に伝えられた伎楽だと考えられている。伎楽は、古代インド・チベットの仮面劇が中国南朝にまず伝えられ、さらに朝鮮半島の百済を通して日本にまで伝えられたものである。大陸伝来の芸能としては最古のものである。続いて伝来した舞楽にも「獅子」があり、こちらは宮廷や寺院の法会の場で演ぜられた。獅子舞の歴史は長く、現在日本各地に民俗芸能の獅子舞が伝えられている。『石橋』の獅子舞を源流から辿りながら日本における獅子の文化と芸能を追う。

第八章 牡丹と獅子

花の王者である紅白の「牡丹」を一畳台二台に配した舞台の上で「獅子」が壮麗に舞い、狂う。これが『石橋』の見せ場である。作者が数多くある花の中から牡丹を選んだのは、「牡丹に獅子」という連想が働いたからである。牡丹も獅子も本来日本にはないものであった。牡丹はともかく獅子に至っては中国にも存在しない。これらは大陸伝来の動植物であり観念であったのであるが、そもそも中国古典の世界では牡丹や獅子がどのように表象されていたのか、日本への伝来と受容の問題も含めて論証してゆく。

終章

第一章から第八章までの各章の論証を踏まえて、最終的には、謡曲『石橋』が聖と俗との交錯、さらには俗なるものから聖なるものへの昇華を主題とする、精神性の高い作品であることを明らかにした。

本研究をとおして、『石橋』の物語世界をその歴史的・思想的・宗教的背景に位置づけることが、博士論文の最終目的となる。

『石橋』は、聖と俗との交錯、さらには俗なるものから聖なるものへの昇華を主題とする、精神性の高い作品であることは、各章が考察している通りである。テキストとしてはごく短い作品であるが、その包含するものは深く大きい。

南北朝時代から唐代にかけて形成された文殊菩薩信仰とともに『華嚴経』の教説に基づき文殊の浄土となったのが清涼山である。『石橋』は、この靈山に本来は天台山にあるはずの石橋を配することで、彼岸の浄土と此岸との超えがたい距離を描き出している。

ワキに配された寂照は、入宋し五臺山巡礼を果たした実在の高僧であるとともに、説話世界では愛執に苦しんだ過去を持つ求道者である。此岸的なものへの執着を乗り越え彼岸的なものへと身命を賭して向かってゆこうという、彫りの深い人物像となっている。かかる高僧が熾烈な信仰心を持ちながらも石橋を渡ることが叶わないことで、『石橋』が表現する文殊菩薩の浄土の超越性が描き出されている。

だが、寂照は文殊の眷属である獅子が牡丹の花のもとで舞うのを見ることはできた。これが、仏教の至高の世界の到り難さを示しながら、同時にそこへと誘うものとなっている。寂照と獅子、そして舞台となる五臺山の石橋を一つに組み合わせることで、仏教的世界観を印象深く描いた『石橋』の構成力に室町時代の能楽師たちの知識レベルと芸術的造形力を窺うことができる。

文殊菩薩の浄土を演目の舞台にしたことにより、獅子舞を崇高なる次元へと昇華させることが可能となったのである。日本の獅子舞文化の転換点となった能『石橋』について総合的に考察したのが本研究論文である。

学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者 雨宮 久美
論文題目 謡曲『石橋』の総合的研究
審査委員 主査：加藤 好光
副査：長野 美香
副査：小田切 文洋（日本大学）

1. 論文の要旨

謡曲『石橋』は、清涼山（＝五臺山）に辿り着いたワキの入宋僧寂照（俗名：大江定基）が文殊師利菩薩の浄土への通路である天然の石橋の前で行き会った前シテ（童子もしくは樵翁）から石橋の説明を受ける前半部と、シテが文殊の使獣獅子に身を変えて勇壮な舞を繰り広げる後半部とを持つ。本論文はこの作品の内容を構成している諸契機、すなわち「寂照」・「清涼山」・「五臺山文殊菩薩信仰」・「樵翁」と「童子」・「石橋」・「獅子舞」・「獅子と牡丹」を取り上げ、先行研究を踏まえながら、典拠を日本と中国の史料、仏教文献、文芸作品、説話集等に求め、八章に亘ってこれら諸契機が有する伝記的・宗教的・文化史的背景を研究している。これを通じて、この作品の未詳の作者と、受容者として想定される当時の多様な階層の観衆とがさまざまな知的水準において多層的に共有していたと想定される知識の再構成を試み、以てこれら諸契機がどのような背景や意味において一般に表象されていたのかを明らかにしている。これを通じて、〈聖と俗との断絶と媒介〉を主題とするこの作品のテーマを然るべき深さと広さをもった視点から俯瞰しようというのが、本論文の目的である。

まず第一章ではワキ寂照（大江定基）の人物を、〈歴史的事実〉と〈説話等における描写〉とに分けて論じている。三河守時代の愛執のエピソードと愛人の死を機縁とする発心、その後、入宋に関する史料や渡宋にまつわる和歌作品、宋における寂照円通大師としての事績、また、『今昔物語集』をはじめとする後代の各種説話に見られる虚実ない交ぜの人物描写、これらを辿ることで、『石橋』が作られた時代の人々に共有されていたであろう「寂照」の人物像を再構成する。第二章は、「清涼山」が文殊師利菩薩の聖地となった経緯、唐代における五臺山信仰、清涼山における文殊の示現等について詳細に検証している。続く第三章は日本への文殊信仰の将来とその展開を主題とする。第四章と第五章で取り上げられるのは、『石橋』の前シテであり、現存のテキストでは、これを「童子」とするものと「樵翁」と設定するものがある。本論文では、古来、童子と翁とが此岸と彼岸を媒介する存在者として表象されてきたことを、第四章においては中国の志怪小説や詩文から跡づけつつ、第五章においては日本の中世における童子と翁の表象を具体的に取り上げて、両者の相互補完性という観点から、説明している。そもそも『石橋』は、清涼山に行き着いた求道者「寂照」が深い谷に掛かる細い苔むした石橋を渡らなければ文殊の浄土に入っていけないという場面設定で、自分の置かれている状況を通りがかりのシテに尋ねるという前半部を持つが、寂照（そして寂照を通じて観衆）を怖じ気づかせるような説明を与えるこの前シテが、最後は獅子となって此岸と彼岸との境界でアクロバティックに舞う。そして、俗界と聖域

とを物理的に架橋しているのが石橋であって、古来、橋が二つの異なる世界を媒介する象徴であったことはよく知られており、第六章においては、主に『古事記』や説話集等の文献資料に取材して、橋の象徴性が確認されている。ここまでの検証研究を通じて総体として浮き彫りになるのは、浄土へと到ることの困難である。そして作品の後半部分では、寂照ほどの高僧をもたじろがせるこの困難をものともせず、シテの獅子が浄土の素晴らしさ・ありがたさをその舞を以て寂照に、そして観衆に、示す。第七章は、中国において予祝行事として定着し、日本に伝えられてからは独自の発展を遂げた〈獅子の舞〉を取り上げ、さらに第八章では、「獅子と牡丹」の取り合わせについて、その経緯を追究している。以上、本論文は、謡曲『石橋』を構成する諸契機についての研究を通じて、本作品が包蔵している豊かな文化的背景に光を当てている。

2. 本論文の評価

『石橋』という一作品について、これを多岐に亘る文化史の観点から総合的に取り扱った研究はこれまでなく、この点で本論文は意欲的な取り組みであると評価できる。仏典や中国の古典詩文・史料、日本の各種文献の調査にも積極的で、そこにはなみひとつとおりでない努力が傾注されており、その成果は論文に反映されている。また、本論文は、発表後に『石橋』研究の基本文献となることを意図して編まれた。将来の研究者が簡便に参照できる資料集という一面も持ち合わせるよう配慮が施されており、その点でも一定の水準に達しているものと評価する。

本論文はあくまで、〈作品の内容を構成する諸契機〉の理解から作品を言わば一つの有機的全体として捉えようとする研究であって、「総合的研究」とはその限りにおいてのことである。したがって、この研究では、本文校訂、作者・制作年代の特定、謡曲の上演にかかる事柄、受容史などは、主題的考察としては割愛されている。さらには、江戸時代以降の歌舞伎の所謂「石橋もの」への展開も、紙幅を割いての論述は見合わせてある。本研究が大学院の課程の中で行われるものであることに鑑みれば、すでに博士論文に求められる分量を超えたボリュームを持つ本論文にこれらの論点を付け加えることは難しい。

本論文は、末尾に添付された「初出一覧」にもあるように、博士課程での学修の成果として個別に発表された諸論文より構成されているが、各章が〈彼岸への超越〉を共通分母としてまとまりをなすよう、これら既刊論文は必要な加筆修正を施した上で再録されている。全体として、『石橋』をこの理念的基盤から論述という場の中で再生する方法が採られており、この点も評価できる。

一点、審査会でも触れられた問題点に言及するならば、申請者は、開いた終わり方をすすめる本作品が多様な解釈を許容する点に触れつつも、必要な論拠を示さないまま、研究全体のテナーとして、文殊の示現でもある〈獅子の舞〉を見ながらも寂照は文殊の浄土に到ることはなかったという読みを採り、これを下敷きに立論している。この読み自体は、無論、批判されるべきものではない。しかし、例えば世阿弥の芸道論や当時の禅仏教にも通底するような、宗教的求道と芸道的修錬とが重なり合うこの境地に本作品の独自の精神性を認めるのであるならば、これに関する自身の解釈を、論拠を添えて呈示しておくべきであった。こういった点も含め、いまだ今後の研鑽に俟たねばならない部分もあるが、本論文がこれまでの研究史の中で単発的になされてきた『石橋』研究を一段高い段階へと持ち上げ

たこと、そしてこれを通じて今後の『石橋』研究にとっても重要な貢献をなすであろうことは否定すべくもなく、学位論文としてその基準を十分に満たしていると判断できる。

3. 本論文の審査の過程

本論文は平成 27 年 11 月 2 日に提出された。同年 11 月 6 日に学長より博士学位申請論文審査の付託がなされ、同年 11 月 17 日、大学院委員会承認による 3 名からなる審査委員会（内一名は学外審査委員）が設置された。その後、審査委員会は計 3 回に亘って慎重な審査を重ねた。初回の審査委員会は、平成 27 年 12 月 2 日、各審査委員が全編の査読を終了した段階で招集され、時間をかけて疑問点・問題点を討議し、学位申請者にたいする質問事項を整理した。その後、平成 28 年 1 月 20 日の第 2 回審査会において、申請者の回答を検討した。同年 2 月 9 日には、博士学位申請論文最終試験および最終審査委員会を実施した。

審査委員会では、本論文の独自性や文献調査能力が高く評価され、論の構成、先行研究を踏まえた論述、アプローチの仕方にも一定の評価が与えられた。さらに、本論文がこの分野における申請者の今後の研究を期待させるに足るポテンシャルを十分にもっていることも認定された。以上の理由から、審査委員会は総意を以て本論文を学位論文として承認してよいと判断した。

博士学位論文
内容の要旨および審査結果の要旨
第14号

平成28(2016)年4月26日発行

発行 聖心女子大学大学院
編集 聖心女子大学大学院
〒150-8938
東京都渋谷区広尾4-3-1
電話 03-3407-5811 (代表)